

標準語と方言

二六 標準語と方言

標準語とは一國語の標準となるべき言語の意、方言とは標準語と同一言語に屬し、しかも多少之と趣を異にせる地方的言語をいふのである。如何なる國語と雖も、其の原始的時代に於ては統一せられたる純なる言語であつたに相違ないが、歳月を経るに従ひ、又場所を變ずるに伴ひ、其の言語は漸次地方的色彩を帯びて來るやうになる。内地に於て東北、關東、中國、九州地方の言語に夫々相違があり、

又朝鮮に於ても地方地方によつて言語に多少づつの相違のあることは、何人も容易に認め得る所である。而して此等地方的色彩を帶べる言語が、夫々特殊の發達を遂げたとしたならば、終には其等地方の人々は互に意志を通すること能はず、甚だしきに至りては、國語と球語との關係の如く、全く別箇の言語として取扱はるゝに至るのである。これは實用上より見るも、又教育上より見るも、頗る不便にして憂慮すべき現象といはねばならぬ。此の不便と不都合とを軽減する必要上、茲に始めて、一國語の代表とも稱し得べき比較的純正なる言語を定むる必要を感じ來るのである。此の代表的言語が即ち標準語である。而して標準語に對し、多少之と趣を異にせる他の地方の言語を方言と稱するのである。

以上の如く標準語は假りに或る一地方の言語を骨子として築き上げられた約束的のものであるから、若し他の地方の言語が新に標準語と極められたとしたならば、上述の標準語は直ちに方言と化するものである。世人は動もすれば標準語を以て高尚優雅なるものとし、方言を以て鄙俗不正なるものの如く考へるが、それは或る程度まで間違つた觀察である。各地方の言語は其の本來の價值に於

て全く同等である。唯政治上其の他の關係により、其等の中から標準語たり方言たるものが分れ出たのに過ぎぬ。標準語と方言との關係は絶對的でなく、相對的であるといふのは、此の事を意味するのである。

内地に於て明治以前には今日の如く國語の實際問題などは論議せられなかつた。随つて全國に通ずる標準語など稱するものなく、各藩思ひ／＼に我流の言語を使用し、之がため相互の意志を通じかねた例も少なくない。彼の九州の一大名と東北の或る大名とが、談話によつて意志を通じかねたので、其の内容を謠曲の文句に引直して辛うじて其の目的を達したといふ有名な話柄なども、萬更好事家の捏造とのみ見ることが出來まい。其の他内地に於ても朝鮮に於ても同様であるが、方言の差が如何に甚だしい地方でも、文語文又は書翰文等を以て意志を發表すれば、相當の知識さへあれば如何なる山間僻地と雖も通せぬところはない。文語文、書簡文使用の可否問題は別とし、此の場合に於て此等の文體が一種の普通的標準的價值を有して居ることは頗る面白い事實といはねばならぬ。歐羅巴に於て「エスペラント」を以て國際語たらしめんとする企劃があるが如きも、其の動機

に於ては上者と全く同一理由に基づくものといはねばならぬ。

さて標準語なるものは如何にして決定せらるべきものであるか。或る論者は苟くも標準語なるものは一國語の代表者であるから、宜しく先づ全國の方言を調査し、其の長を採り短を棄て、一種の完全なる理想的言語を作るべしと論ずる。併しながら、言語なるものは人類の間に自然に發達進化し行くもので、人力を以て濫りに之を變化、阻止することの出來ぬものである。如何に博識なる學者が腦漿を絞つて完全なる理想的言語を案出したにしても、それが其の國民の慣用に適せぬものであつたならば、一日も言語として其の生命を保つことが出來ぬ。如何に完全なる標準語と雖も、餘りに抽象的のものであつたならば、決して永く行はるゝものではない。即ち全國の方言中の純正優雅なるもののみを寄せ集めて標準語となさんとする企の如きは、いふべくして到底行はれ難き理想論に過ぎぬのである。然らば如何なる言語が標準語として最も適當であるかといふに、それは當時の方言中の最も勢力あるものを以て之に宛てなければならぬ。

暫く國語に就いて之を觀察するに、平安朝時代に於ては、京都はあらゆる文化

の中心であつた。随つて當時の標準語は京都の言葉であつた。源氏物語に東國の言を東聲あづまこゑといひ、平家物語に齋藤實盛の言葉を坂東聲はんどうこゑと評し、拾遺集にあづまにて養はれたる人の子は、舌だみてこそ物は言ひけれといへるなどは、何れも關東地方の言語を方言として卑しんだ事實を物語るものである。然るに其の後源平時代より鎌倉時代に推移するに及び、東國武士の勢力は勃然として興起し、從來東言葉あづまことばとしてさげすまれた關東語は、京畿の言語に對して少なからざる影響を與ふることとなつた。太平記に當時鎌倉武士の盛んに京都に入りしより京都の風俗一變したることを述べ、更に彼等が京都公卿の言を嘲り、公卿も亦坂東語を使用したなどいふ記事あるを以て見ても、一斑を知ることが出来る。其の後徳川氏幕府を江戸に開くに及び江戸は一躍して政治文學上の中心地となり、江戸言葉は京都言葉に代つて天下の標準語たる榮譽を荷ふに至つた。勿論其の初期に於ては、「東雅」（新井白）（石著）に

「又、のたまひしは（木下順庵を指す）我年十二三の時に、貞徳（貞徳永）の言ひし事あるなり。其幼き比はひ迄は、京の人のものいひ今の如くにはあらず。今の人のいふ所は

多くは尾張の國の方言相雜れるなり。これは信長、秀吉の二代打ち續きて天下の事しり給ひしによれるなり。又近き程は三河國の方言移り來るなりと言ひしとの給ひしなり。此事によりて思ふに、貞徳の幼き比はひの京の人の詞といふも、またふるき昔の京の人のいひし所のみにあらず、足利殿の代の程、東國の方言相雜らはぬ事をも得べからず。云々

といへるが如く、各地の方言相雜りて頗る混沌たる状態を示したものであらうが、元祿の頃より江戸言葉は漸次琢磨洗鍊を加へられ、茲に江戸特有の文學が築き上げられ、終に京都言葉に代つて天下の通用語たるに至つたのである。明治時代に至り、帝都は京都より東京に移り、政治、文學、經濟等の諸中心は悉く此の地に集中するに至つたので、東京語の勢力は異常なる發達を遂げ、今日に於ては唯一の標準語として何人も之に準據せねばならぬこととなつた。

暫く之を朝鮮語に就いて觀察するも、三韓以後三國、高麗等、各國に於ける言語分布の状態は今日のところ不明であるが、其等各國語の標準語たりしものは必ずや各首都の言語であつたに相違ない。李氏朝鮮以後に至りては政治の中心は

常に京城にあつたので、京城語が全道に亘つて最も勢力あるものとなつた。今後朝鮮語の標準語を制定しようとするならば、其の標準を京城語に採らねばならぬことは勿論である。或る人は平壤地方の言葉は最も古形を存し、最も純正なるものであるから、之を以て標準語とせねばならぬと論ずる。成程平壤地方の言語は或る点に於て他地方のよりも古形を存して居るかも知れぬ、併しながら單に古形云々を以て事を論ずるならば、平壤以外の地に平壤語よりも遙かに古い語形の存することを否み得ないのである。要するに古語、古形の有無は標準語問題の必要條件とならぬのである。多少の轉訛はあるにしても、京城語は今後朝鮮の標準語たるべき運命を自ら賦與せられて居るのである。

之を要するに或る言語の標準語は必ず其の首都の存在する地方の言語でなければならぬ。現に英國の標準語は倫敦語、佛國の標準語は巴里語、獨逸の標準語は柏林語、支那の標準語は北方官話といふ風になつて居る。

然らば標準語たるべきものは首都の言語でさへあるならば如何なるもので構はぬかといふに、さうは行かぬ。同じ首都の言語とはいひながら、其の中には

標準語は首都の官語

標準語は首都の官語を標準とする

種々の種類がある。例へば東京語に就いていへば、其の中には上流中流下流の言葉遣ひ、男女に依つての別、又所謂山の手言葉、下町言葉等の種類があつて頗る複雑を極めて居る。標準語は其の何れに根據を置くべきかに就いては随分説がある。併しながら今日一般の説では、中流社會の言語に土臺を置き、更に之に一層の琢磨を加へるといふ點に歸着して居る。即ち如何に中流の言葉とはいひながら、著しき訛音、訛語等は之を避け、精細なる研究を遂げたる後決定せらるべきものである。朝鮮語の場合も全く之と同様である。戦前の獨逸が其の標準語を國民教育の上に強制せんとし、非常なる努力をなしたことは、世界各國の認めて異數とする所であるが、其の標準たる、俳優の言語の上に置かれ、所謂舞臺語を以て國內の方言を統一せんとしたのであつた。我が國に於ては明治三十五年國語調査委員會なるもの設置せられ、政府の力によつて國語の音韻語法、假名遣等に關する諸調査を進むると同時に、民間に於ても各種の調査意見を發表する學者が續出するに至つたから、國語の標準語問題も遠からずして解決せらるゝに至るであらう。